

911.3

八

俳人百家撰



全

雄齋國輝畫  
綠亭川柳輯

# 俳人百家撰 全

東京 博文館藏版

史俵仙の名ハ古今和歌集子出せ世々不風骨はくも有り  
廿七巻に達し守武宗繼を祖と一貞独り式を云々め  
宗因ハ族林の一派をびこり芭蕉為中興之志ありし  
より貴き心跡も侘を學びざるハ形く句集を俵仙  
志抄の數をわたりねど皆極ハ心なき味あり歌仙の巻紙  
巻一自注編一その面款の世情を考へ入り學び  
此此松島秋乃こをきくは根のねもころ子世子傳へぬこと  
兼許あるやその中子法字置くる説述く入るる風  
調これ彼所集く書素不修もふれ玉の都るは法字のひひあ  
形く只古を志の心りて遂に侘人為權ありぬ志抄は若菜州の  
のりとあてふ侘れとも字を吐て人を欺くやうにハレと  
主村の求りあてふ是智者の眼もふるもぬくといはれや若菜  
とあてふなりねんといはれやも忘れぬは若菜と集ると志のり

赤永八郎此書



綠亭川柳



芭蕉庵の旧地ハ  
 深川六間堀要津  
 寺同所長慶寺ハ  
 古墳あり六佛頂  
 禪師現住の地ありて  
 翁由縁の寺あり  
 古池の吟の今の  
 松平遠州侯の庭中  
 小存せる池ありこの  
 辺ハ昔庵の在り  
 此句あり延宝の末  
 桃青伊賀の上野  
 と出て江戸小下り  
 鯉屋杉風家ハ入



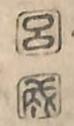
後維髪と素宣と  
 改又杉風より芭  
 蕉庵の号を譲請  
 て夫のち彼地ハ  
 庵を結ぶ此古池ハ  
 原杉風が蘆小て  
 ありしぞ

古池や  
蛙飛こむ  
水の音

水の音

應帝

三多魚縮景



# 哲 叩 排



貞室

宗因

玄魚模

芭蕉

# 先



貞德

雅堂

玄圃筆

守武

宗鑑

芭蕉十哲

蕪村筆意

去來

許六

北枝

支考

其角  
丈草

嵐雪

野坡

越人

曾良



丈松塔の照耀は酒の  
 うまさと新酒つくと  
 ようやくまうの酒持の侍  
 保川の水きせぬ入く桂  
 田舎いふまからさき橋  
 智より形もよとよま  
 のらふれぬぬぬぬぬ  
 文の白と縁を又わぬ  
 と業平松長のもれ  
 糸と松林のまは  
 何々もれせくまを  
 中りく山は業平の  
 笑顔り目と知る人  
 子まはるは是ぞ

敬人若水  
 とうえ

樂翁彦



よのひん  
 勇あり  
 と形ぬぬ  
 仁あり  
 智はかろ  
 あら  
 れうき  
 案山子  
 の那

古筆手鑑

芭蕉翁

かみのと  
 あはしりあり  
 づもに  
 とちの  
 ねりけり

北村湖春

月前歌

湖春

かまひさうな  
 あられりあのみ  
 るもるる月  
 かなうしを

御占の發句の体

一は花を流すやうくはじか  
 系横は川流ひさる徒ひき  
 山をよぼすくたふ鳥か  
 楓々の夜をく啼ひさるの花  
 是れをよめうて成あうら  
 みくれば有りまははは  
 花のまりの東は名を川  
 友山やよびさるものつらハ  
 生を白くわの毛のせくよ山橋  
 赤むるは雨也きくさき  
 ささるも老の歌やものめが  
 かにもあうとあまきこく  
 水ははるるまのまをさる  
 水月あわさるまのまをさる  
 その好武のまをさる人  
 此のぬれ掃めてまをさる  
 一はうまうま

職人盡設句競



五老并許六

花のまの川のま  
 海若ふり就  
 許六

東林坊支考  
 春風也 蓮二層  
 傳子の乳  
 燃ぢぢ



笠縫

雪折や  
むしり  
かふる  
笠のちひ  
松意



傘さし  
かきさうじ  
賊り  
胡蝶の  
おとうる  
重五



栗田焼  
まき茶の  
かんり  
日くれつ  
井上茶碗  
一草



鍛冶

開き  
野うらの  
あきぬ  
柳うら  
名分



酒造

利牛

あきあて  
酒名の  
あき  
うら



紙ま

ある松の  
あき  
紙子  
その女



宝書齋

燧  
油  
其角

油を  
よめい

金のつり

大高氏

山をわくわく

杉とて

松の島

子葉

松任素園

中  
初  
千代

もの思ひ  
徳物や  
まき  
よき  
女月白羽紅



鞠師

いとやま  
うや  
花の日  
ゆき



此日 咫尺

弓師

箏の  
よき  
まの



去来

土器作  
ぬき  
火や  
初り  
位



連歌師

秋人  
うき  
まの

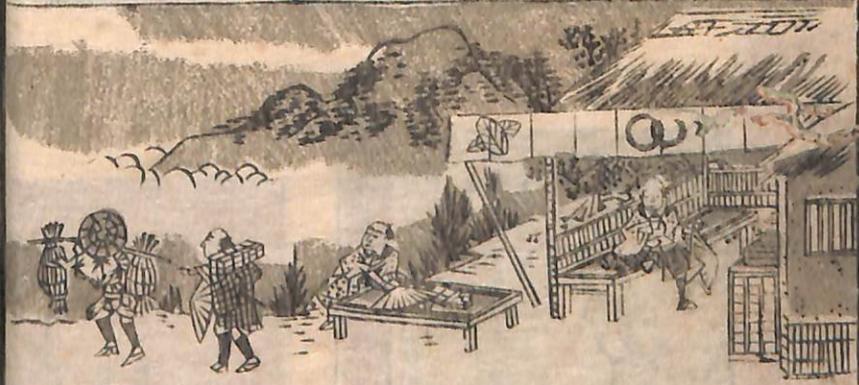


扇拵

若し  
くつ  
病



上原



其角が庵の後小尾花の生球  
一せ前ありの思ふは七と十  
元結と衣の世をその端ありと  
あつひのいふ其角登りて  
文七もあつたる庵のわらわ  
けの後は必は官医相江初年の  
め牛の子は傍の牛のふを懐  
牛の子はあまの夜庵の思牛  
此のありててもあつた  
文七の白髪は白髪ありては其角  
天神を信すると降し中後後  
の以松の辺まで春人とあつた  
ふにひの隅の隅まであつた  
一里と一里の隅の隅まであつた  
下をさすは陸子のわらわ  
はあまの思ふは七と十  
其角陸子とあつたわらわ  
の像ありて人か一見神あり  
とてあまの思ふは七と十



雨の仕方さう初り唐土  
少くハ小蛇舌を毒入あつた  
根を枯着の外を打て頃ハ舞  
とのひは野及里村までハ所  
の留の敷しとて田唄をうた  
盤社様師白唄どうえを近  
まてハ其角が三の年の雨を名  
く世はあつたては三の年の雨  
四圍してハ雨を名く三の年  
花果るんを思ふ換は新を  
坂ハ天神の社とて雨の俳諧  
自然ありては雨花を思ふ  
神風の雨とて思ふは七と十  
これよりあつたるあつたて  
後ハ雨を思ふは七と十  
夜ふり思ふは七と十  
あつたては思ふは七と十  
これよりあつたるあつたて



立君  
枯き



女所お  
杖風

杖風

渡守



時白  
傘下

傘下

炭やき



毎の一字  
香木

木樵



兼めり  
園指

園指

鉾押



鉾押  
許六

許六

桶ゆひ



永機



文雅の人相は新柳の如く  
お止まり小軒中のまをく言  
虎のまをく言とての六年も  
源極を好め移りて住み居の  
ま心とあまのたかると思ひ  
指のつとまると思ひ送りた  
あの日傍るまると思ひ送りた  
まをく言とての六年も  
源極を好め移りて住み居の  
ま心とあまのたかると思ひ  
指のつとまると思ひ送りた  
あの日傍るまると思ひ送りた



他少午かま門の形跡を  
文雅の人相は新柳の如く  
お止まり小軒中のまをく言  
虎のまをく言とての六年も  
源極を好め移りて住み居の  
ま心とあまのたかると思ひ  
指のつとまると思ひ送りた  
あの日傍るまると思ひ送りた  
まをく言とての六年も  
源極を好め移りて住み居の  
ま心とあまのたかると思ひ  
指のつとまると思ひ送りた  
あの日傍るまると思ひ送りた



華結

ぬいよう  
物のい

ののど  
四方の春

竹妓



生きゑし  
撫子や

花車

かきこぞ  
うゝい

越人



鳥帽子を  
あがり折

きそえよ

けふの月

其角



守成ハ伊勢内宿の神也...  
中月本太夫のハ秋夜...  
連一也の中百首と...  
ふさのけし初と...  
伊勢輪船と...  
花梅やわら...  
其路の...  
風流...  
あ...  
竹...  
あ...  
天受十八年八月八日...  
七十七葉

薄雲

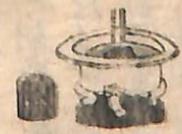
たきや  
夜



宮路

あふり  
夜

炭火の



水

一夜

うそ水



奥州

夜

我

若糸



漆之助

あふり

友の茶



十三 松山

飛りや

風

瀬川

うそ水

うそ水

日の



荒木田守武

青柳の

眉の

岸乃

心



の南

心敬僧都ハ比叡山住心流法藏  
ある時北野連教の命

人をかくつてかへる科のまへ  
身ハいつ煙りの湯ふのころへ入  
かく閉らぬを天満宮に感  
くみふ葉の本草を水の巻  
の巻本を掲げ白ひーとんされば  
後院にたふお傍都のほろを立  
て煙りの宮とのり

ひそそそのふふみどりそふのち  
とふ枝の法をこ身小風つてそ  
石の上ふも世をぞいとん

乱れまふふのさ死の病をそ  
鬘向のよぬ一とと優あり

さげふふ一むうを多く  
花をそねえれ油きと茶葉  
柳ちりかろふまきた文へり  
月小こい月もまき都くれ  
大神宮法末千のふ  
目のまうげ花もむつらうと来

宗祇ハ犯死の巻を掲げり  
月をまう一住のほの回流を掲  
扇を掲げ一とと名四海あるあ  
る秋名月のころりふふ

一と名の月をまう今来が  
又のう一と名の月をまう

一と名の月をまうとこよひが  
扇ト掲あても心の用ひかう  
のあり又掲及の巻を堂の再  
建ありとまうの連舟掲あり  
宗祇うとまおおの都このを  
又の連舟のんねあん  
あつて懐紙ありと名えとる  
て取初んとまうと宗祇

ゆはまうはゆのまう  
一宗祇のたふをこまうと  
ふ二字の余りありと  
いひて早く致建二年八十二まで  
張そそと甲雲さお葬ま

心敬僧都

ちる花の

音

きく

ほと乃

みる浦

のま



宗祇法師

せみ

さるい

さら

何白乃

かどり

あり





宗鑑の近江源氏依り本義清が末  
 孫にて支那師三郎と号し足利義  
 隆公の母は將軍亮とす相  
 繼して山及新の寺に至り佛法  
 を悟道始メ勲歌心をもて終  
 一に宗鑑のふかき人ことを難  
 きと見極め相傳の句をばつひ小  
 遊園歌集ある時其物語著  
 たり何人の歌をもとの句を尋  
 び一向を流下句あり

こそいふまゝむらありなり  
 書を下し付て何ゆくの上の句ふ  
 由付と直へ宗鑑をて其いよの  
 内ことあり我々これ解るるなり  
 これかつけてもかひのあふよ  
 是俗のよの句おも相敷いこそま  
 なり

手をついでありとる地い  
 けの時句ありといふ天文八年

僧上寺音登之の智道兼備の  
 高僧ありあること人衆をわけて  
 何ふても其語を獨りけし小筆を  
 立てて開けの三角三具を表し  
 ころめ一求一心を示すと兼書し  
 「おんくよりの句をみるなりあり其  
 徳を慕ふ者多しある時大虎お前  
 ひて我今同還れりある疑ひこと  
 あり皆迷ふて決をさるべしと  
 決り人を宣ひ改め時いころとて

高々天地清濁色  
 五妙境界淨刹臺  
 三惡火坑阿鼻底  
 一機不轉古今更  
 斯頌を書筆を授山門不出堂を  
 振けの資益なる火車雲中ふ現れ  
 せ侍上人のう務る大虎むむい  
 公堂より又もやいでし中車の  
 あり開て又まの目をみよそを  
 かくみして流さるるなりといふ

元朝の

見る

もの

をん

富士

乃山

山濟宗鑑

音卷上六

わぶ

あり

お

り

の

おき

扇の姿



松永貞徳の道徳新と号し、  
 長政九少和歌を遊ばせ、  
 紫ひ長崎子を及とて高秋ふ  
 きて藤原ふを雲を得連、  
 借の二物分能借花の本の、  
 免許せしき、  
 の書を編、  
 經の素形をたし、

八月二十日、  
 他き、  
 水と又、  
 人とな、  
 花と又、

徳元八波、  
 仕、  
 山幸の、  
 徳元、  
 夏、  
 此、  
 何、

法名、  
 智恩寺、

松永貞徳

何とゆて

や

あひ

たてよ

花乃



徳元

や

不

人

目出度

門北松





Handwritten Japanese text in cursive style, likely identifying the character.

Handwritten Japanese text in cursive style.

Handwritten Japanese text in cursive style.

Handwritten Japanese text in cursive style.

Vertical columns of handwritten text in a cursive style, likely a transcription or commentary related to the illustration above.



Handwritten Japanese text in cursive style.

Vertical columns of handwritten text in a cursive style, likely a transcription or commentary related to the illustration above.

玄九の行跡山田より出て医術を  
業として佛僧の真徳の門に入るは  
一師を承け生業を修むる地よりして  
世に小徳をくわたりしをうけのてを  
を好む徳を修むるは同時の人と  
撰出さ富士の嶺山

名をぬくはるるはるるを  
四十二歳の妻

守りあへてしるし十二神  
香のあはれをいふるはるる死  
ある時瘧をひきかへるはるる  
あつしよゝ返るるはるる  
舟のたのむるはるる  
いふはるる  
はるる  
はるる  
はるる

李吟の行跡北條の産と拾穂軒  
と号し國をめぐり長せり奥州ふるれ  
食録若干なり名を海内ふる  
そゝ方量抄八代集抄花草紙春  
暁抄源氏源月抄をそゝめ  
をくろと書物五十余部みゆぶ  
備備へ真徳の門よりあるといふも  
まゝ一種の雅韻なり

富士の山師走ともあはれ  
一僕とせりあつて花を  
復ふけさするといふ門の松  
名を  
地をわたりしはるる花のたふ  
信を車にすむるに  
いそぐせはるる  
衣傷  
いそぐせはるる  
八十五歳ありて安永二年五月より  
李吟の行跡北條の産と拾穂軒

高島玄九

高島玄九

高島玄九

高島玄九



拾穂軒李吟

拾穂軒李吟

拾穂軒李吟

拾穂軒李吟

拾穂軒李吟

拾穂軒李吟



湖春の息男きんの息男きんふてはの鐵  
を經で秋葉あきば所と多る能備のりの地  
翁おきなふまこり風洞ふうどう情情じやうじやうあり松  
まふのりふまびく来て銀花  
みなる香々かぐら貞徳さだたけより此こゝに  
口史くし秘傳ひでんの書を枕青まくらあおふあふ  
物語ものがたりの教訓けうくんなるふ時とき俄いふ思おもひ  
念ねんをたつる折せり々々

あめつちの咄うた一いつさう時ときが  
發はつたを流ながれられては懐なつふ  
く度たびのぬれうさぬのさふさ  
名の御おんぬれうさぬ一いつさうの  
さうのや蓮れんふえふれてなるん  
日ひころ氣きの御おんぬれうさぬ  
牡丹ぼたんさくくもや花はなをさくく  
條じょうから一いつさうの折せり々々  
ゆく年としよ京きやうへとあるふ思おもひ  
元禄げんろく十年じゅうねん正月しょうげつ十九日じゅうくにち父ちち八はち年ねん先  
まて強つよスすぬ山やま花はな果はな強つよと号ごう一いつ

山間やまのまへ元禄げんろく十年じゅうねん正月しょうげつ十九日じゅうくにち父ちち八はち年ねん先  
佛ぶつ像ざうを奉ほうじて門かどへ入りて  
小こ砂すなりして徒た然ぜん草くさ被ひ極ごく極ごく補ほを  
著あし長ながの方かた如ごとく死しすまふと書かき  
佛ぶつ書を教しやうへ上うへ擗ひいて情じやう熱ねつ強つよ壯さう壯さう  
の人ひとあり中なかつも宝たから蔵くらとのふぬを  
持もたてて初はつ夜やの教しやう訓くんを傳たづねり難がた  
ふまて名なを言いふ

傘

まかちるかゝるさうの花はなのち  
まひをさく

令しやう持もちや於お於お面めん白はく一いつ月げつと花はな  
紙し

ちへ教しやうやことそのそ那なの花はな如ごとく  
十じゅう家け經きやう

美み用ようハハままぬぬささるるを花はなの教しやう  
たふ心こゝろ

月つきのううああふふ小こ體たいううそその海うみ  
持もち

後のちふふく道みちつつさされれややささるる月つき

小村湖春こむらこしゆん

我われ

弱じやく

當たう

山やま元げん漢かん

露つゆ

際せ

花はな成なり

あつたの

好この味あじの那な



岡田將監の英法大直のまゝの  
 比人たる存我のまゝをさく  
 小和を好むまゝ上へ道をも  
 ぐれ古人の親意をれとあるま  
 和漢の襟を拾ひその考をあき  
 りめ人も知りぬふも親の考の  
 能くありありある夏都ふのあり  
 近湯殿の四見録ふかきまは  
 五月をみよくとそまきくあめ  
 一あそまゝこれハ將監

あへのこへをさかき務まひ  
 扱をつけて中よられどとの外  
 小叶ひのたきあるとありあり  
 かのるれ幸ひふあひまをとり  
 同様の徳ありなり又行脚を自  
 世の種治をまゝに借標ゆか  
 九和をさそや相の初登  
 尾羽の風小ぬり袖の夜  
 月取のハ痛まゝを離して

秋の句當屋ハ竹勢山回  
 住て名譽の首人あり特許  
 く考ふ十二律の調子を以て物の  
 善悪を智辨を得たりある時他の  
 家ふたりの門の地蔵をねめて実  
 音の怪しきを憐れんふはまぬれ  
 その家不保狂人ありそは清の  
 小及び一とありりまふ入るを  
 人の教く人い難を遠れし  
 奇とのみへハ能く守るま  
 風を志くハ幽明をあふそ  
 天竺草納の独吟

あふハ南の村や北野殿  
 とハ号のあこを老まの  
 古采ある光り小枝の羽を  
 月ふあこりせまふふ  
 秋風の吹ふくりこるあふれ  
 能人とは女その女まは門下  
 出雲二十と集めて  
 寛永七年

岡田将監



友や  
 宿の妻

秋田望一

花乃

兄



可  
 色  
 可  
 後

梅翁宗因西山堂... 八代小住... のち或門を... 依又小... 又... 河をひ... て世... 兼... 引て... 夏... 基... 友... わ... くれ... その... 五...

田代松... 宗因... 梅翁... 兼... 引て... 夏... 基... 友... わ... くれ... その... 五...

梅翁宗因

浪速

津子

う

夜乃

あや

春花



檀林軒松意

雪折や

心

か

是れ

目録





ト養ハ泉忍操の産みて牡丹花  
 宵梅の起りて他はみほけり  
 慶云と号し医業も名が揚ぐ  
 人尊敬は操北の左ふありて  
 いふ一花女地獄の住し高嶺と  
 のふも夏るれト養抱奇の  
 南北のミカをともちて  
 た一りのたをたありたり  
 又信より小指で

そみよの木の月の所を  
 わりけりゆのせまふそりはし  
 晩年 台余ふよりて京都  
 召れ官職を擧りて授地洲月  
 否後地を親領とされは在り  
 ト養の本道とこそ思ひ  
 うま地をとみ外科とこそ  
 ト養和學子小通ト歌能傳ともふ  
 臣吟ふゆあれは柏子ト養となく  
 唱へり法眼不昇遊と

西の八景園の門トありて大坂  
 徳林の一人あり任官社  
 釋今二万三千句を吐きより母ふ  
 二万堂二万の時と稱せしれ又松舟軒  
 とものいふ人國學末秀で文章妙  
 を以て戦化小一代男小夜嵐未をわ  
 延松門九通つも門より出るとある  
 行白魚行の時法園よりぬき  
 味で西行の法ををあるとある  
 上りの云々人情をたぬは徳林  
 の一風を示せば素額して門下小  
 入る者声し補常も一きり即ちて  
 平ふるや多あく生るる前足  
 細の糸の足ぬきもありはあ月  
 花持ふあつくれは夜ぐ  
 元禄六年八月十五日五十二歳ありて  
 卒ト養公因を養ふ小養を

井ト養

乃

乃

乃

乃

青  
 山椒



井原西行

大眼目

乃

乃

乃

乃

乃



大流二千風ハ作樂射飛の者小て  
 十五葉より船道水うさぶ日奉  
 行舟と年月をへ臨くの風倍を  
 儀三船の御意化するを論し  
 友を集めて御合の真を信し  
 景眺るを旅し旅中の記を奉り  
 まりて語り懐日記續て紙うは  
 六百余樹小及水後題を披露を  
 行新文集との晩年樹明木樹の  
 海迎不務、殿位上人の條を披露  
 一、  
 の本傍を山堂ふたさめ  
 号、  
 不碑を立て東社居士と稱し行  
 舟の門出四月四日ありるを命  
 船の送云ありと

津世  
 世始以株折の宿の喰違を  
 今と文で其後とあり

安永貞室ハ一慶軒と号し幼き  
 時より貞徳翁小はては余年  
 高才ありて然翁小達するを余  
 之尊敬に重頼ホ尼を流し  
 能道免許を信時陳の藝も  
 天長くちひとをわらや秋の月  
 貞室は小旅して  
 ぬう一とみ人の花の文つ西  
 秀吟あまこの中不名なき  
 これハ一とまのうのうのう  
 中後既器を捨て事流ふりり  
 秋の月ハみよの雲やふこの意  
 武流ふりり扇田川一入一と  
 人のがまうりしを  
 虫のまをりしは流るる人か  
 二世花の下と後一六十葉  
 安永元年七月七日建法寺納定を

大流三千風

花子来

笠

か

一

葉の那



安永貞室

涼

了

舟

なれや

秋半月



三浦公高の... 盛の... の自... 画

三浦公高の... 盛の... の自... 画... 又... 伏... ね...

高尾

君

今

弱

わ

郭



乾貞怒

水草小

い

花

売

菅の邪



貞... 又... 待... い... 宋... 車... と... 道... と... の... 七... 股...

惟中へ備前の彦とて同西一  
 有又剛々堂とあり伊勢の堂  
 備前をまうひ御書ふて和書  
 よくし御金草紙續き名世を書  
 らしと家園とも云ひ堂とありと死  
 土佐の傳實が画し一丸の影を  
 とめて家園の海にわたりて一丸  
 史ふそつて家園前をたそへて

學憲伝作のこめ

影向ありけるまへん

お筆の先達のくと家園のこい  
 家園も顔もあつて人との体

とえやねみそくめて其の月  
 ぞくちくとえん人うん山さ  
 さらあね風もろくろくお氷  
 帯ぬるしよまふ旅ある衣之

除夜小

鬼をあらぬ公時小方相氏

五十四歳少くえ縁五年

野々山とて八俗御書  
 御書をもよく一藤御親王の書  
 法をうひ画もよくう京臺といふ  
 自画を用ひておび草と著して  
 鳥丸家の御殿をまひて草能主は  
 加筆とて意父の通旨の時務吟  
 九百吟をひくす中ふ

管と消く申との先や法院女末  
 子向ぬる花や九品の海土粒  
 花補の縁

花とのいへりお御書に花とていへ  
 花の吹雪のれりしあつてよのけら  
 花衣のふまふらん昔これうら  
 の種を種てうの成妻の世とありん  
 とありそののれれとて

八月のころをみゆをそ花の向  
 花あはれとてさるる花の山  
 月花のとも月をみゆるゆふ  
 雲文の年七十一歳とて強也





其前（東）の息（あ）を（橋）本（の）母（の）  
 性（ま）り（因）家（よ）養（れ）て（能）信（を）業（は）  
 宝（た）井（の）玉（が）依（り）住（す）後（は）本（に）  
 宝（た）井（の）子（は）狂（を）堂（を）善（哉）庵（の）号（を）  
 たり（持）を（文）巖（に）高（し）学（び）志（を）  
 志（を）然（に）画（を）成（し）一（を）人（を）う（け）て（其）  
 松（の）あり（ふ）戲（を）を（し）ん（て）遊（ぶ）  
 あり（田）雨（の）冷（た）く（た）ま（を）  
 驚（か）す（也）  
 軒（の）の）  
 素（の）吟（を）

次（の）浦（に）ろ（ふ）河（を）保（つ）  
 一（つ）ふ（箱）を（千）浦（や）大（井）川  
 文（を）ら（び）家（を）め（ぐ）て（家）断（り）  
 添（成）の（画）  
 拿（持）も（月）お（お）く（て）ま（さ）か  
 幸（山）の（嶽）

宝（永）四（年）二（月）廿（日）廿（七）で（終）

摘（み）書（ぶ）  
 や



ひ（び）き  
 り（り）  
 宝（永）四（年）其（南）

山（の）口（に）素（の）堂（を）

浮（ぶ）葉（は）

大（の）蓮（を）

風（の）情（を）



時（の）よ（く）は（る）若（さ）より（海）邊（の）地（は）  
 花（で）埋（め）と（り）れ（ば）今（の）時（分）  
 庵（信）堂（の）山（の）口（に）素（の）堂（を）  
 と（の）い（ふ）や（び）翁（を）交（と）し（て）地（の）ち（正）風  
 骨（を）洗（つ）と（り）文（を）よ（く）國（を）ま（を）  
 自（白）也（も）ま（さ）高（尚）剛（特）あり  
 沈（し）ん（て）多（く）級（を）ま（さ）る（ふ）折（が）  
 茶（の）花（や）利（休）が（目）あ（い）た（其）山  
 年（も）ま（あ）り（を）流（さ）る（て）死（川）  
 日（の）こ（い）お（る）ま（あ）る（ふ）の）月（の）こ（い）  
 亦（川）別（荘）小（蓮）池（を）わ（り）交（を）對（て）  
 晋（の）意（遠）を（蓮）社（ふ）び（し）て（り）柳（が）  
 社（中）と（の）入（り）是（より）遊（ぶ）り（其）翁（が）  
 日（に）社（家）集（の）風（骨）を（慕）い（れ）  
 此（の）追（尋）小（念）翁（を）繼（ぐ）  
 わ（れ）れ（と）亦（財）也（り）の）山（を）家（某）  
 七（十五）日（に）京（師）二（年）八（月）十（五）日（に）  
 感（念）中（程）也（院）小（某）



秋風小折てかろし紅葉の枝  
 元禄六年八月廿七日歿也

去来二十小して宝永元年  
 九月十日歿也

小病て死に逝き...  
 松倉嵐茶...  
 秋風小折てかろし紅葉の枝  
 元禄六年八月廿七日歿也



浪化へ京都東門の連名ありて  
 中井波徳泉寺の住僧之を頼の  
 門小入生のを白濁とて文ふ  
 名あり満豆とのふ坊主の後を著述し  
 研て小刀ふ一此の波をむかへ  
 くれは甘き煎をりてむらば肉をふむ  
 ける道程もありんばへんはをまふ  
 工の粗さか穢を養ふふことあり  
 茶を飲それれおの歌を飲あらし  
 筆をこれの春の目を揮きこき  
 竹田うらぬる人ふも玉計の浪の  
 ありふこそさるや波の瀬の漫々こ  
 ちて湯とも沸きもひらぬれさふを  
 砕とる一を粹あるを用上とる家  
 生波香の小入へて正の糸はつぼ  
 せて自慢の吟の鼻をうた鐘のちへ  
 波うやもてる個満豆の二字をりて  
 ぬれぬの万福を信はぬる心あり

井波浪化  
 春詩  
 や  
 札  
 拵  
 書  
 此  
 こころ

考へて浪化の著すて物か  
 八く考へての人あり 物持傳れて  
 小歌一と翁翁中も拾遺是歌をひ  
 毛ふりて浪化の著すむさうの  
 翁浪後ふも浪の双樹寺小松阿野  
 と著て碑をそて自浪をせせ

あつとむ	む世のま	名ありぬ
世波平陸の	はたやう	ふふも波
ありし世は	三のまを	まありて
そのま川の	まのま	まのまを
四て一ま	まのま	なてま
浪まをまふ	ぬり川や	ま世のま
ままをま	そのま	そのま
つつ秋風の	まありけん	まありぬ
ままをま	まのま	まありぬ
ままをま	まのま	まありぬ

浪化の著すて物か  
 翁浪後ふも浪の双樹寺小松阿野  
 と著て碑をそて自浪をせせ

東花坊支考  
 秋書  
 軍虫  
 怒  
 吉野山

三十一  
 三十一

許六は江の根の武士森川...  
 此の物語は...  
 雲の日は二のまくの...  
 秋風の吹くるか...  
 人を知るも...  
 雲の日は二のまくの...  
 秋風の吹くるか...  
 人を知るも...

雲の日は二のまくの...  
 秋風の吹くるか...  
 人を知るも...

雲の日は二のまくの...  
 秋風の吹くるか...  
 人を知るも...

とらうせいの きんぎょく  
**五老井許六**



若者の海若  
 光の  
 花の  
 心とる邦

とらうせいの  
**五老井許六**

雲の  
 花の  
 心とる邦



とらうせいの  
**五老井許六**



牛若の二何ふ里雨とりふの農家  
 久方ちの居るひの老のりか十四者の  
 時主人村御と好む戀ふ巻をうとせ  
 巻たるが牛若をかく巻さらと對ふ  
 ふその矢をせし連の田の時うるふあ  
 う屋我のまら名屋と持来れはま  
 人も吃らばたを料りてを辺の老  
 せよび強りなきまを喰とまふ牛  
 若ふいの三浪牛若主人のふるを  
 めひわがその望田村あたる田へ  
 雄をまうて遊ぶと牛若あまふ  
 名ひまふのまをまひ髪を切て道  
 か若とまう的の心と名をあふこひ  
 村のかまふの若老を法ひ後連の  
 外他つりかく信をこりて屋御の福  
 てふそまの杖里人お信とまわの  
 以九月廿日物故とてふといひて  
 その句のまふ成るくくそその日ふ  
 死と 持世

牛若の肌をくちされり搦てを奪り  
 せしこよのふ巻をまへりけし程も中  
 こそ乙女の姿を似似れともはありのまひ  
 踏ぶくくとしてまをまひまひと  
 てまうしてまあふく又へてまふ  
 のまをぬかふみまはまてまふ人の  
 衆裡酔てのまをまふ盃と柄杖を  
 さぬり人の肌まふともまふはまふ  
 ぶんとまをまふのまふげふまふ  
 肌のをまうくまふまふまうてま  
 てまふまふまふとまふまふまふ  
 風もかまうく將々并をまめてまひ  
 素とまふまふのまふまふまふま  
 うちまふまふまふまふまふ  
 あげまふまふまふ  
 日ありいろのあり

足助村牛若



みま  
 め  
 目成  
 きよの光  
 えむ  
 蓮の花

入ね  
 瀬川



とひ  
 いさ  
 みや  
 乃月

此坊は相川の産て異国の道  
 人あり故に道をよみてまじり  
 と味縮みいふまでと違つてつみ  
 舞ひ舞ひておひむらぐ奴業とせ  
 暫く進みありといふも久し  
 番士をよむる工次不違ふあり以  
 街道を小廻りしてより後法  
 番門前よりて番士をよむる  
 御世をよむる事せ

五戒のこ後を

殺生戒

邪淫戒

偷盜戒

妄語戒

飲酒戒

いうわどの虫のいのち状律儀り  
 狗よふを捕ふくゆのふふ  
 拾ふるゆふふゆふの種のかた  
 ありふふのふふ世をまれ其露  
 此の世の世をまれ其露

一ツある家由枯井のへのふふ  
 とありてふ女の思ふかたつら  
 御前ふ来て

精進やをのこ蓋きて五月間  
 松葉小櫛を入るふ次々の夏  
 ある神やねらまらまらるる  
 志小ぬふふまつ法のゆふ入る心  
 能事ふて御友と交り目録のゆふ  
 んとする内京よりゆふ来て候別み  
 百里来て百里あり白丸あり  
 京保正年五月十日午二時死す  
 死ておいてゆふき月とせんことせ

しと坊

声

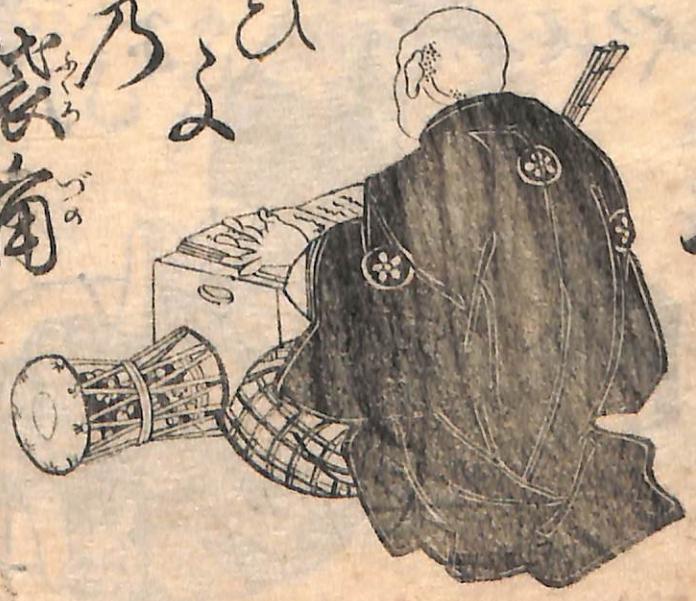
え

ぬ

おのひ

康乃

袋角



らひ

き

身

悦

やべ

生

る野百里



琴風の縁波の都ありしがはなれ  
善門ふけひ菊のしりて其の南の橋  
女房の二重の句を世と違ふの各  
をより琴風百重と世も違へれども  
しり菊の奥の細道をくくく  
思ひき保八年二月松島の人と  
旅の傍にせし小院水公より

汝も旅行の工を不ふさごと  
まゝりて候別のもちまゝ  
つねの年よりれりや

待てよまてねまの物傍り  
に女房の天竺人への中みその女  
袴の外けゆるすのま柳が

百里も候別よ  
みちのこも都きて清水道のふ  
冠里公せんへの

行琴風を築ふ築ふ築ふ築ふ  
年二月七日 押上屋敷の候別  
しりてはなれ

秋色の個丁集る者の始りて切  
名をの波のい其の都のい十  
の時上野の光をさすりて清  
秋の考のいしり井の燈あかりし  
大般の公候るりあつて  
井のこの橋あかしの池の畔  
秋のまのいりふり頃のい主  
時を海にのい同々々の船とを  
甲乙を海にのい同々々の船とを  
道のうれあめり又あり秋色候と  
世も違ふり又ありと世も違ふれ  
か保良のと秋を不候なまのあまを  
りけふの秋候ふとれりや  
秋色の候候ふるたのその候候  
かふ有しと候ふとれを候候と  
候候候候候候候候候候候候  
男の子とてりり豆を保十年四月十日  
育まふり候候也  
見一愛のこあて色のうらや

琴風

毎々

や

物

新

たり

秋色

規

早

苗

女

那







秋風ハハク小田所様を慕ふ  
 との魚向をみて見仙居と云ふ  
 の見入る見早く世を去るは秋風家  
 を徳く願ふ富この世の上の魚の味  
 て耳かき遠く松青の島ありて  
 遠行の思ひも時秋風とて世の能  
 を見返つて山根ふと世せんとは  
 むるんと世を去るは秋風とて世の  
 中も山根ありんや山中も俗世  
 高き山根ありんや山中も俗世  
 の徒ふあはひされと市中も山根ありん  
 うらん秋風曰く逃走を思ふ事車馬  
 の喧しき可あんと侍して秋風の  
 体川に至りて雲を住まぬ懸念の  
 も起る秋風曰くこれにて秋風  
 秋風曰くこれにて秋風  
 八十余ふと申候十七歳六月十日狼ス

秋風  
 手  
 うらた  
 やび  
 團扇のみ  


越前越人ハ屋敷を名の人  
 の英傑ありと少はるは時  
 比人のよふありありと  
 世なること行所の同道を  
 んとせしむるを看ふりて  
 有けん遠くはるを見へり  
 家ありては遠くはるを見へり  
 とせしむるは遠くはるを見へり  
 越人上京して依華八海の  
 備へ女房の體御前とて  
 を免れ異くはるを見へり  
 西のては遠くはるを見へり  
 ほうくは遠くはるを見へり  
 海の波は遠くはるを見へり  
 を免れ異くはるを見へり  
 道下りては遠くはるを見へり

越人  
 花  
 子  




北枝のわが令海の研脚ふて御  
の芭蕉の門人ありては生か  
火災ありて北枝の家も焼く  
人しくわがこつひききりし  
北枝平筆ふりて

わがわがこれをもむらふは  
かく同様の書情をわがこ  
うそは又た人のわが焼くは  
従者人先小走りたりて以前  
茶情いふといひしをふれ

りらとも小枝も筆もそと  
けがりのうもふりそまん  
北枝こころ

りらとも小枝も筆もそと  
そよこの筆をりらと  
は時倫交集ひて焼くは  
出馬くう後箱の橋下海

さそくは縁をぬくや  
文学の北枝小枝の筆

北枝のわが令海の研脚ふて御  
の芭蕉の門人ありては生か  
火災ありて北枝の家も焼く  
人しくわがこつひききりし  
北枝平筆ふりて

わがわがこれをもむらふは  
かく同様の書情をわがこ  
うそは又た人のわが焼くは  
従者人先小走りたりて以前  
茶情いふといひしをふれ

りらとも小枝も筆もそと  
けがりのうもふりそまん  
北枝こころ

北枝  
山川  
心  
あや  
花の  
室



白炭  
心  
は  
な  
の  
室



佛行跡不覚へは山主御物の  
傍して申奉り候を辭して候事  
處居して御跡をこの  
御景無難のんぞ

怖しう報ひおれさかーサ  
拙いづつふかどとらぬ我者  
其難を好むけれあつ山法師  
まろく是ては病の死をみる所  
ひ花らぬ万ふも病ひあひ其  
と給せし又の日行けるよ茶  
かまのこて終日何のそあ  
方方立候まありなうこて  
なふも何ぞりてあし申  
何をかーと流ふかけは是  
ゆふうくし山法師う飛う  
をんあうと終能くし  
食物りあることたうと  
知らぬ心なり山王や大海の  
眞加ういよもあつと

世めらるはかりぬことあり

後藤の家の精進をなれ  
抱の松ありしはかきをは  
曲舞(約)よりありて松十一  
連れり不定くける後藤も  
あまの近き思りあつ父母  
本ありんて思し父母を  
てりんて思し父母を  
かこひ思し父母を  
流令をきてあつ父母を  
費とて思し父母を  
けきおて同道してり  
後藤の家の精進をなれ  
りもかき思し父母を  
かこひ思し父母を  
茶室のこて思し父母を  
病も日々思し父母を  
んあつ思し父母を  
後藤の家へ報ひさせられ  
あれども思し父母を  
こき思し父母を

ひえのふぐく  
日枝不覚

依抱

松

かさ

あり

冬も  
里



淡萩  
手  
うき  
人  
よ

の  
火  
禱  
病





本因の徳六郎の如き者も  
 蔵の御きりては氣味を以て  
 こけまへ廻りて氣味ありける  
 仍狎の時本因の家をさぐりて  
 かられ家や同く蕭々とお細三坂  
 本因院の斜るるは殊に  
 の感光ありて感して吾れ  
 け目せむ手練も氣味を  
 中さしをらん小因のそそ  
 破れも氣味を籠て  
 死すもせぬ徳六郎のそそ  
 今しは氣をゆれは本因もた  
 舟のそそをりて  
 秋のそそをりて  
 兼少孫より多分お徳のうら  
 と為りて本因も  
 妻におくれり人を懐  
 るに氣味ありて  
 於龜厨も徳ありけり



本因の徳六郎の如き者も  
 蔵の御きりては氣味を以て  
 こけまへ廻りて氣味ありける  
 仍狎の時本因の家をさぐりて  
 かられ家や同く蕭々とお細三坂  
 本因院の斜るるは殊に  
 の感光ありて感して吾れ  
 け目せむ手練も氣味を  
 中さしをらん小因のそそ  
 破れも氣味を籠て  
 死すもせぬ徳六郎のそそ  
 今しは氣をゆれは本因もた  
 舟のそそをりて  
 秋のそそをりて  
 兼少孫より多分お徳のうら  
 と為りて本因も  
 妻におくれり人を懐  
 るに氣味ありて  
 於龜厨も徳ありけり



百非

四十三

高橋君...  
 其母の...  
 徳の門...  
 山...  
 行...  
 山...  
 世...  
 心...  
 我...  
 西...  
 其...  
 思...  
 其...  
 其...  
 其...

高橋君  
 其母の  
 徳の門  
 山  
 行  
 山  
 世  
 心  
 我  
 西  
 其  
 思  
 其  
 其  
 其



高橋君...  
 其母の...  
 徳の門...  
 山...  
 行...  
 山...  
 世...  
 心...  
 我...  
 西...  
 其...  
 思...  
 其...  
 其...  
 其...

高橋君  
 其母の  
 徳の門  
 山  
 行  
 山  
 世  
 心  
 我  
 西  
 其  
 思  
 其  
 其  
 其





秋の坊の加及の士あり後法祥にて  
花暦一湖南の幻住庵小坊ひは  
まの慈願うめて

我痛の秋のちのちを死を  
秋の坊日遊世の能あるれ世の  
迅速のこころねんをのふゆり

あぐて死ぬけいけい入るはの  
道そのらして秋の坊を  
秋の坊の御流をあらはし申は芭蕉  
の門に入て御流をあらはし申は芭蕉

これ炭の字をあらはして  
秋の坊の御流をあらはし申は芭蕉  
の門に入て御流をあらはし申は芭蕉

秋の坊の御流をあらはし申は芭蕉  
の門に入て御流をあらはし申は芭蕉  
の門に入て御流をあらはし申は芭蕉

秋の坊の御流をあらはし申は芭蕉  
の門に入て御流をあらはし申は芭蕉  
の門に入て御流をあらはし申は芭蕉

# 秋の坊



秋の坊の御流をあらはし申は芭蕉

# 孫元牧童



孫元の御流をあらはし申は芭蕉











乙由の縁勢と田の社司兼總圖考とのりたる所を極く人々と  
 とをりて極く極の中を極く人々と  
 妻木合とのふりたる人等と極く人々と  
 學びたる人等と又下愚の若くも遠く  
 入るる極ありて人々と極く人々と  
 肉切るといふことむつりたる極ありて  
 又同族なる人等との極ありて  
 や又極く人等との極ありて  
 然るに人等とせりて由ありて  
 ありと極く人等と極く人々と  
 極ありて極ありて

極ありて極ありて  
 乙由の縁勢と田の社司兼總圖考とのりたる所を極く人々と  
 とをりて極く極の中を極く人々と  
 妻木合とのふりたる人等と極く人々と  
 學びたる人等と又下愚の若くも遠く  
 入るる極ありて人々と極く人々と  
 肉切るといふことむつりたる極ありて  
 又同族なる人等との極ありて  
 や又極く人等との極ありて  
 然るに人等とせりて由ありて  
 ありと極く人等と極く人々と  
 極ありて極ありて

十方ありて極ありて  
 乙由の縁勢と田の社司兼總圖考とのりたる所を極く人々と  
 とをりて極く極の中を極く人々と  
 妻木合とのふりたる人等と極く人々と  
 學びたる人等と又下愚の若くも遠く  
 入るる極ありて人々と極く人々と  
 肉切るといふことむつりたる極ありて  
 又同族なる人等との極ありて  
 や又極く人等との極ありて  
 然るに人等とせりて由ありて  
 ありと極く人等と極く人々と  
 極ありて極ありて

乙由

を

皆

扇

おの

の風



菊園

人乃

わ

さ

竹

さ



二川の飛中富山の産して町の太  
守おぼへて越道ふの御所きんあり  
蕉門の柳おほひて風洞待あり  
琵琶くこたれ風吹やひと花  
夕の正をあらはのうてあやの妻  
あつ村都ふのりんこを思ひ又か  
お備友をもつたをんを愛し一  
の顔ひををせふさうふあをを  
て解をあらひひそりお止る人  
ありこてもひあそその道人の  
由よる辰と月盤そのこちち入道と  
あり家ををさうして

来んまう人の中の途ておしを  
びをを障子ふらきのら一五出り  
お守まらうくばらうさうさう  
あめおめもかくかあうそれて  
その好あそくお住をうく老後  
山所山置お虎を後ひ生後  
お世をさうして



入道とて袂空と改めお梅は飛  
行おとてお人お海川お後  
原ぬくまらあのおふそく後  
梅やさふ行こ

梅屋のきを門わたの梅もあ  
女壁のの顔ふ

そのま入うごかこ入のこ出て  
九年お小若因十年お若さ  
お直寺の天心禪師おををま  
よく禪意お吐くこそおふれ  
お人都より紫野お住てお  
おの御清法師おはて先途中箱根  
濃本おて致をま保十八年四月  
十二の辞世  
お世をぬぬらうくおとておの  
地獄つがの極楽へ





不角ハ世傳堂盧雲家ともい  
 承子十八人余さるるへ主君ともい  
 けり不角冠里公の以敵ふ出を  
 山相公とある元與所の相傳の時  
 か持孝や年多もあつたけのま  
 正主冠里公執政職とあるせりふ  
 也ふは冠里公に置りたるありあつ  
 云の初やも流のちうくあはれ  
 こそふれの内あひあつて  
 敷のそもまひかきとまりだを  
 不角元福不流傳あり守保ふ  
 法眼小のをも執子と道へまふ  
 聖言ふ女の子を養ふあつて  
 こそふれを海へ  
 けいひくともいふは傳を敷  
 終ふまふあつたりわ敷せり  
 不角之内あつたり時  
 より改め拾ひのころは様ゆが  
 九十二集まで宝徳三年九月九日  
 宣徳二年のころにあつたり

不角  
 暁々  
 不角  
 英菊  
 不角



不角の傳を世傳堂盧雲家ともい  
 承子十八人余さるるへ主君ともい  
 けり不角冠里公の以敵ふ出を  
 山相公とある元與所の相傳の時  
 か持孝や年多もあつたけのま  
 正主冠里公執政職とあるせりふ  
 也ふは冠里公に置りたるありあつ  
 云の初やも流のちうくあはれ  
 こそふれの内あひあつて  
 敷のそもまひかきとまりだを  
 不角元福不流傳あり守保ふ  
 法眼小のをも執子と道へまふ  
 聖言ふ女の子を養ふあつて  
 こそふれを海へ  
 けいひくともいふは傳を敷  
 終ふまふあつたりわ敷せり  
 不角之内あつたり時  
 より改め拾ひのころは様ゆが  
 九十二集まで宝徳三年九月九日  
 宣徳二年のころにあつたり

吾はせむ村  
 妻の海  
 心先  
 のひ  
 のひ  
 のひ



存義の武田家の武士の末で  
三浦家とは姉妹の家督を  
継いだの世は後にして遠慮の身と  
あり有難と号しその内祖  
一巻ありて特勝録

弘法のらち一室山に  
ありて是を尾籠つと小松引  
茶かくは五日の月や布りち  
こまよ布やあひれり茶ささる  
四布五布とのかたがのふと  
並のうらとことぬぐう後  
存義茶湯明ふ任りてひら  
まのうら家系由ちてふ  
てあふるとは八傘さして  
船借とて人を人徳  
して室前の敷るの西八傘の  
うらとてひらけあふり  
存義依田山を和を  
願ふ存義ありて

存義は武田家の末で  
三浦家とは姉妹の家督を  
継いだの世は後にして遠慮の身と  
あり有難と号しその内祖  
一巻ありて特勝録  
弘法のらち一室山に  
ありて是を尾籠つと小松引  
茶かくは五日の月や布りち  
こまよ布やあひれり茶ささる  
四布五布とのかたがのふと  
並のうらとことぬぐう後  
存義茶湯明ふ任りてひら  
まのうら家系由ちてふ  
てあふるとは八傘さして  
船借とて人を人徳  
して室前の敷るの西八傘の  
うらとてひらけあふり  
存義依田山を和を  
願ふ存義ありて





糖雨の京室町百左右二のりて  
 行きて西へこのまゝの契の契と  
 不ゆの中ふ奇あつて富士を山して  
 道小迷ひ四日野小休無宿常の景  
 竹を降唱れがまの二平輩けり  
 時くもて忽ち精神さのちうあつた  
 もまのりふと谷の向ふか敷あは  
 そまのり体も小あつた大あつた  
 るたまふ本道う山が由通ふあつた  
 ぬ月と弾あつたうせあつたう  
 踏て自あつたうと筑あつたうは人  
 胸中殺殺の心をあつた  
 宿屋とていふたはたきあつた

百井塘雨  
 声  
 小菰の  
 もい  
 れら



教蕭わてま  
 異風を  
 が風特を  
 のあふ小  
 ては流る  
 小人とい  
 晴るるれ  
 このあか  
 むらま上  
 けの妻小  
 さいのそ  
 達へのう  
 教はれい  
 悟道の白  
 有とあそ

教はれい  
 悟道の白  
 有とあそ

滝野瓢水  
 去年の  
 かしら  
 打ち  
 かしら









